様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：８２６７４
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ００９９１

研究課題名（和文）高齢期の家族・仕事・地域・経済と健康のダイナミクス：コホート・年齢差の研究

研究課題名（英文）Family, work, community, economic, and health dynamics in old age: Cohort and age differences

研究代表者
小林　江里香（Kobayashi, Erika）

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長

研究者番号：１０３１１４０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　32,500,000円

研究成果の概要（和文）：高齢者の健康や幸福感（well-being）の規定因については多くの研究が行われてきたが、各要因の効果が、年齢や出生コホートあるいは時代によりどのように異なるかについての知見は乏しい。分析は全国の60歳以上の代表標本を対象に1987年から継続する長期縦断研究のデータ（JAHEAD/NSJE）に基づく。2021年には新たなコホート（～1961年生まれ）を追加して第10回調査を実施した。社会経済的要因の健康への効果、および退職と地域参加促進との関係は年齢により異なっていた。さらに、独居と精神的健康との関連や、客観的・主観的孤立の出現率は性別や調査年により異なることなどを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、60歳以上の高齢期においても、健康やwell-being（WB）のリスク要因、あるいは退職後の地域参加に年齢による違いがあることを示した。長寿化が進行する中で、高齢期の各年齢段階に応じた適切な支援を検討する上で重要な知見と言える。また、近年は、家族、就労参加、地域とのつながりなど、高齢者の健康・WBを規定する要因そのものが急速かつ大きく変化しており、高齢者が時代とともにどのように変化しているかのエビデンスを提供する本成果は、今後直面すると予想される社会的課題への対応や制度変更を行う上で有益な資料となり得る。

研究成果の概要（英文）：Although the determinants of health and well-being among older adults have been documented, little is known about how the effects vary by age, as well as the birth cohort or historical period to which different cohorts belong. Data were obtained from a longitudinal study (JAHEAD/NSJE) started in 1987 with a nationwide representative sample of Japanese adults aged 60 years or older, in which the 10th wave survey was conducted in 2021 with the addition of a new cohort (those born before 1961). Analyses revealed age differences in the effects of socioeconomic factors on health trajectories and of retirement on community participation. Furthermore, the association between living alone and mental health, as well as the prevalence of objective and subjective isolation, varied across time periods in conjunction with gender.

研究分野：老年社会学

キーワード：高齢者就労　地域参加　家族　健康　ウェルビーイング　時代的変化　全国調査

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

人口の高齢化が進むにつれて、高齢者に対する学術的・政策的関心は高まっており、特に高齢者の健康や、幸福感・生活満足度などの主観的 well-being（以下、WB）の維持・向上にどのような要因が関連しているのかには大きな関心が向けられてきた。高齢者の健康や WB には大きな個人差があるように、健康・WB に影響を与える要因や影響の強さも集団によって一様ではない可能性があるが、その点についての知見は未だ十分に体系化されているとは言い難い。本研究では、特に、出生コホート（コホート）による違いをふまえた時代的変化と、高齢者内での年齢による違いに焦点を当て、性別による差異とともに検討する。

まず、同じ年齢の高齢者を対象としていても、調査時点が大きく異なれば、各コホートが経験してきたライフコースの違いや、調査時の時代的背景の違いにより、得られる結果は異なる可能性がある。近年は、既婚子との同居率の低下、未婚率の上昇、高齢者就労や地域とのつながりの変化など、高齢者の健康・WB を規定する要因そのものの状況も急速かつ大きく変化している。高齢者が時代とともにどのように変化しているかを明らかにすることは、今後直面すると予想される社会的課題に対応するためにも重要である。また、年金制度や介護保険制度の見直しを行う際には、制度導入時の高齢者との比較・検証が不可欠であろう。

さらに、「人生 100 年時代」に象徴されるように長寿化が進行しており、日本では今や 65 歳以上の 2 人に 1 人は 75 歳以上のいわゆる「後期高齢者」である（総務省「人口推計」）。前期高齢者に比べて後期高齢者では健康に問題を抱える割合が高いなど、高齢者内でも年齢によって特徴が異なることへの一般的な理解は進んでいるものの、後期高齢期以降の健康・WB の加齢変化の仕方や、健康・WB のリスク要因が年齢によってどのように異なるかについては十分解明できていない点も多い。

２．研究の目的

全国 60 歳以上を対象とした長期縦断研究のデータを用いて、１）家族、仕事、地域参加、社会経済的地位のそれぞれの多寡や相互関係、２）健康・WB やそれらの加齢に伴う変化、３）１）の 4 要因が健康・WB に与える効果におけるコホートや年齢差について、性別による差異とともに明らかにする。

３．研究の方法

（1）長期縦断研究の概要と計画変更

本課題の分析には、東京都老人総合研究所（現　東京都健康長寿医療センター研究所）が、ミシガン大学、東京大学とともに 1987 年より実施してきた全国高齢者パネル調査のデータを用いる（National Survey of the Japanese Elderly: NSJE, Japanese Aging and Health Dynamics Study: JAHEAD　https://www2.tmig.or.jp/jahead/）。

第 1 回調査は、1987 年に全国から層化二段無作為抽出された 60 歳以上の男女 2,200 人が訪問面接調査に回答した（図 1 の A）。その後、新規標本（図 1 の B～E）を追加しながら 3～6 年ごとの追跡調査を継続し、2017 年までに 9 回の調査を実施した。各回とも対象者本人への面接調査を基本とし、健康と生活の実態を把握するための様々な質問を行った。対象者本人が重い病気などで回答できない場合は、一部の項目について家族等への代行調査も実施した。第 9 回調査までに 1 回以上調査に協力した人は 6,665 人、代行調査を含む回収率は 67～93%であった。

本計画内では、2021 年に 1961 年生まれまでのコホートを追加して第 10 回調査を実施し、第 9 回までと統合した縦断データの解析・公表を 2022～2023 年度に行う予定であった。第 10 回調査は予定通り実施したが、COVID-19 パンデミックの発生により、一部調査手法を変更した。また、コホート効果だけでなく、COVID-19 の影響を考慮した分析が必要となったため、本研究は 2022 年度で終了し、2023 年度より、第 11 回調査のデータを加えてコホート差やパンデミックへの適応・回復過程を検討する新たな研究（JSPS 科研費 JP23H00063）に移行した。

（2）第 10 回調査（2021 年）の実施

第 10 回調査は、2021 年 10 月～12 月に実施した。第 8 回調査から追跡を継続している図 1 の対象者 E（2021 年 9 月末時点で 69 歳以上）、および、新たに全国から無作為抽出した F（60～92 歳 2,700 人）には訪問調査を行ったが、面接時間短縮のため、初めて留置法を併用した。対象者 A～D（85 歳以上）については、訪問調査は実施せず、健康状態等を確認する短い調査票を郵送した。

第 8 回からの対象者 E については、本人面接調査に 661 人（死亡・施設入所を除いた回収率は 72.2%）、代行調査を含めると 706 人（77.1%）から回答を得た。新規対象者 F は、1,136 人（42.5%）、代行を含めると 1,227 人（45.9%）が回答した。本縦断研究で回収率が 5 割を下回るのは初めてであり、特に大都市圏で低かった。留置調査は対象者本人が面接に回答した場合に依頼し、E は 638 人（本人面接完了者の 96.5%）、F は 1,016 人（同 89.4%）より調査票を回収した。

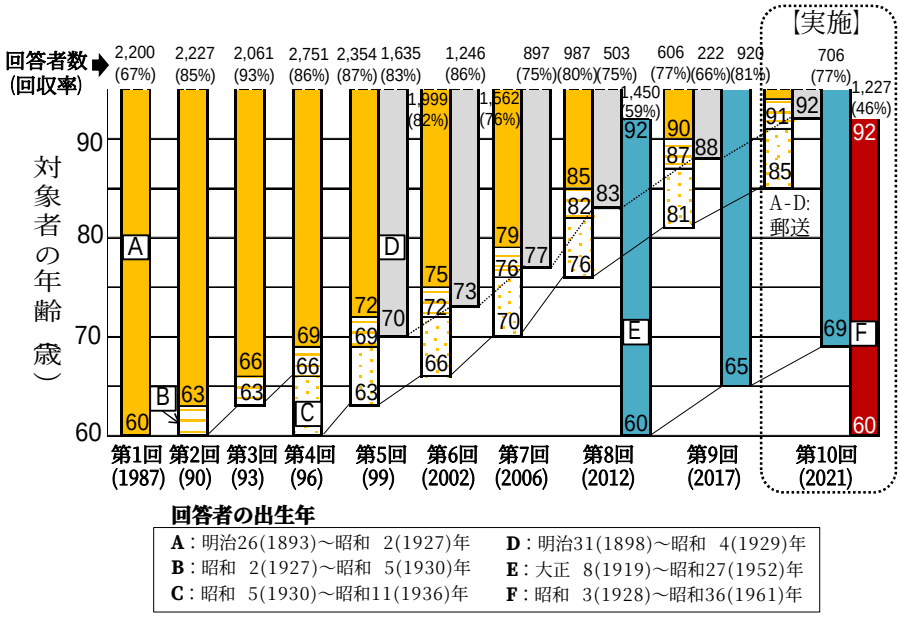

図１　全国高齢者パネル調査の対象者と年齢の推移

４．研究成果

３の（1）に記載の通り、本研究は 2022 年度で終了したため、研究期間内の研究成果は、既存データを用いて年齢差を検討した結果が中心となった。以下は主な成果を紹介する。

（1）年齢による差異

①生活機能の変化における社会経済的差異（Murayama et al. *JAMDA*, 21(6),734-739.el, 2020）

背景と目的：日本人高齢者における生活機能の長期的変化は、欧米先進国の高齢者とは異なると考えられるが、研究は限られる。本研究は、日本人高齢者の全国代表標本を用いて、25 年間にわたる生活機能の変化を同定し、各変化群に属する確率における社会経済的差異を検討した。

方法：1987 年～2012 年に実施した 8 回の縦断データ（6,193 人）を用いて、基本的・手段的 ADL（日常生活動作能力）の変化について、ベースライン時の年齢（60～74 歳、75 歳以上）別に group-based mixture models に基づき分析した。

結果：図 2 のように、60～74 歳については、minimal disability（80.3%）、late-onset disability（11.6%）、early-onset disability（6.2%）、moderate disability（1.9%）、75 歳以上については、minimal disability（73.3%）、early-onset disability（11.2%）、moderate disability（11.3%）、severe and worsening disability（4.2%）のそれぞれ 4 つのグループを同定した。60～74 歳では、社会経済的地位（教育年数、世帯収入）が低いほど生活機能に支障のある群（minimal disability 以外の群）に属するリスクが高かったが、75 歳以上ではこの関連は見られなかった。

結論：70～80%の高齢者は、長期にわたり機能的健康を維持していた。観察期間中の脱落者の問題はあるが、本研究は、機能的健康における社会経済的格差は加齢とともに収束していくことを示している。得られた知見は、多様な社会経済的背景を持つ高齢者の機能的健康を維持を目的とした健康政策や介入をデザインする上で有用である。

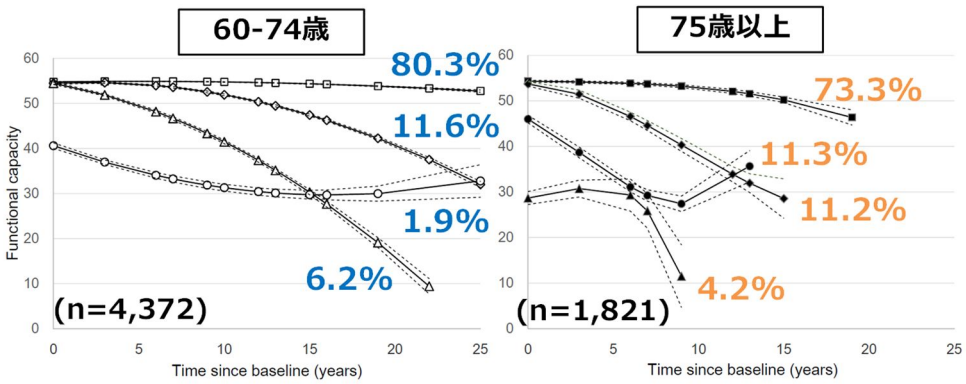

図２　ベースライン時の年齢別にみた生活機能の軌跡

②社会的孤立と認知機能（Okamoto & Kobayashi, *J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci*, 76(7), 1441-1451, 2021.）

背景と目的：社会的孤立の認知機能低下への影響を報告した研究は多いが、社会的孤立の測定や、内生性（説明変数と誤差項との相関）が考慮されていないなど研究手法上の課題もあった。本研究ではこれらの課題に対応した手法を用いて社会的孤立と認知機能との関連を評価する。

方法：1993 年から 2006 年のデータを用いた（4,411 人）。認知機能は、Short Portable Mental Status Questionnaire(SPMSQ)を用い、社会的孤立は、知覚された孤立（孤立感）を社会的交流、社会的関与、社会的支援などから推定した包括的指標を用いた。社会的孤立と認知機能との関係の検討は、パネルデータ固定効果モデル、および因果関係をより厳密に検討できるシステム一般化モーメント法（GMM）により行った。分析は、性、年齢（74 歳以下、75 歳以上）、教育歴によるサブグループ別にも実施した。

結果: 男女ともに、孤立と認知機能との関連は有意であり、75 歳以上では、社会的孤立が 10%増加すると、認知機能が男性で 2.4%、女性で 2.0%低下していた（74 歳以下では有意ではない）。しかし、この関連は、内生性を考慮したシステム GMM では確認されなかった。

考察：先行研究で報告された社会関係と認知機能との関連には、内生性によるバイアスがあった可能性を示唆している。因果的な影響は観察されなかったが、必ずしも孤立の健康への悪影響を否定するものではない。社会関係は正負両方の影響をもつ可能性があるためである。社会関係が健康に及ぼす影響の詳細なメカニズムを明らかにするためには、さらなる研究が必要である。

③退職と社会活動（Kobayashi et al. *Research on Aging*, 44(2), 144-155, 2022）

背景と目的：高齢社会において仕事からの引退年齢は上昇しているが、そのことが個人や地域にどのような影響があるのかは明らかではない。退職と仕事以外の社会活動への参加との関連が、年齢によってどのように異なるかを明らかにすることを目的とした。

方法：1999・2002 年（第 5 回・6 回）と、参加者の異なる 2012・2017 年（第 8 回・9 回）のデータを統合し（3,493 人）、2 時点のデータとして用いた（T1:1999/2012、T2:2002/2017）。ボランティア活動と趣味・学習活動のそれぞれの 2 時点間の参加頻度の変化（変化なし、減少、増加）を目的変数とする多項ロジスティック回帰分析において、就労変化（就労継続、完全引退、部分引退、非就労継続）と T1 時の年齢を説明変数とし、性、社会経済的地位、社会関係、健康、WB、調査年をコントロールした上で、2 変数の主効果および交互作用効果を検討した。

結果：ボランティア、趣味・学習とも、完全引退者が参加を増加させる確率は高齢になるほど減少し、増加確率が就労継続者を上回ったのは 70 代前半までに退職した場合に限られた。フルタイムから短時間就労になった部分引退者は、60 代前半のみ趣味・学習活動の増加確率が就労継続者を上回ったが、ボランティア参加については就労継続者との差は見られなかった。

考察：退職前からこれらの活動への参加を促す取り組みや、高齢になってから新しい活動を開始することを妨げる心理的・環境的障壁を取り除くことが重要と考えられる。

（2）時代的変化

①独居と抑うつ症状（Kobayashi et al. *J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci*, 78(4), 718-729, 2023. (Online first: December 22, 2022)

背景と目的：先行研究では、高齢者における独居と WB との関係は、国による違いがあることが示唆されている。本研究では、WB を抑うつ症状により測定し、同国内（日本）でも、都市度や時代の違いという社会的文脈の違いによってこの関連性が異なるかを検討した。

方法：第 9 回調査までのデータを、回答者の参加開始年により 3 つの時期（1990 年前後、2000 年前後、2015 年前後）に分け、575 市町村の 4,655 人から得た連続する 2 つの wave の回答を用いた。階層的一般化線型モデル（HGLM）の枠組みで、追跡時の抑うつ症状における 2 時点間の居住形態の変化の効果が、性別、都市度、調査時期により異なるかを調べた。

結果：概して、独居継続者および独居開始者は、同居継続者に比べて抑うつ症状が強かったが、この傾向は、特に男性の場合に、大都市の住民より都市度の低い地域の住民で顕著だった。さらに、独居継続者と同居継続者の抑うつの差は 1990 年前後より 2015 年前後のほうが縮小していたが、これは同居継続者の抑うつ傾向の上昇によるものであった。

結論：居住形態への志向性（同居を好むかなど）や公的なサービスの利用可能性が異なる社会的文脈では、独居が高齢者の WB に与える影響も異なる可能性がある。

②客観的・主観的孤立割合の推移

本成果の一部は、2023 年 2 月に発行した第 10 回調査の結果を紹介する冊子において報告し（https://www2.tmig.or.jp/jahead/dl/pamphlet06.pdf）、下記の学会発表を行った：
小林江里香ほか：全国高齢者における社会的孤立･孤独の割合と関連要因の時代的変化－COVID-19 の影響に着目して．日本老年社会科学会第 65 回大会，横浜，2023.6.17-18.

背景と目的：社会的孤立・孤独への注目が高まっているが、長期的推移を確認できる全国規模のデータは少ない。小林・深谷（社会福祉学，56，88-100，2015）では、1987 年～2012 年調査に基づき、男性高齢者の孤立割合の増加を報告している。本研究では COVID-19 流行下に実施した 2021 年調査を加え、客観的孤立だけでなく主観的な孤立感（以下、孤独）についても検討する。

方法：1987 年、2012 年、2021 年に新規に無作為抽出され、面接調査に回答した 60 歳以上（2,199 人、1,324 人、1,136 人）を繰返しの横断データとして使用し、一部分析では、1999 年の 70 歳以上の新規対象者（1,405 人）も含めた。「孤立」は同居家族以外（別居子、親戚、友人、近所の人）との対面・非対面交流が週に 1 回未満、「孤独」は、「まわりの人から孤立していると感じることがある（時々/多い）」場合に該当とした。孤立・孤独割合については、一般化線形モデルにより、性別、年齢層（60 代・70 代以上）、調査年の主効果と交互作用効果を確認した。さらに、性・調査年別に、孤立・孤独の有無を目的変数、年齢、社会経済的、健康、ネットワーク関連の要因を説明変数とするロジスティック回帰分析を行った。

結果：孤立・孤独とも年齢層と調査年の交互作用が有意で、60 代と 70 代以上では異なる傾向が見られた（表 1、図 3）。60 代では、2012 年から 2021 年にかけて孤立割合が男女とも有意に増加し、孤独も同様の傾向があったが 2 時点の差は有意ではなかった。70 代以上では、男性の孤立割合が継続的に増加し、男女差が拡大した。孤独割合は男女とも 1987 年が最も高かった。孤立・孤独の関連要因については、2021 年のみの傾向として、60 代の孤独リスクが上の年齢層より有意に高く、女性では親しい近所の人数と孤立との有意な関係が消失した。

考察：COVID-19 は、社会活動が活発な 60 代により大きな影響を与えた可能性がある。一方で、女性における関連要因の変化を含め、COVID-19 による一時的影響ではなく、高齢期に参入した新しいコホートの特徴である可能性もあり、今後の調査で明らかにしていく必要がある。

表 1　モデル効果の検定
（1999 年を除いて分析）

要因	Wald χ^2
【孤立】	
性別	75.59***
年齢層	10.15**
調査年	11.20**
性別×年齢	1.73
性別×調査年	17.03***
年齢×調査年	7.48*
性別×年齢×調査年	8.37*
【孤独】	
性別	2.01
年齢層	3.12
調査年	87.95***
性別×年齢	1.15
性別×調査年	7.12*
年齢×調査年	16.38***
性別×年齢×調査年	1.19

* p<.05　** p<.001　*** p<.001

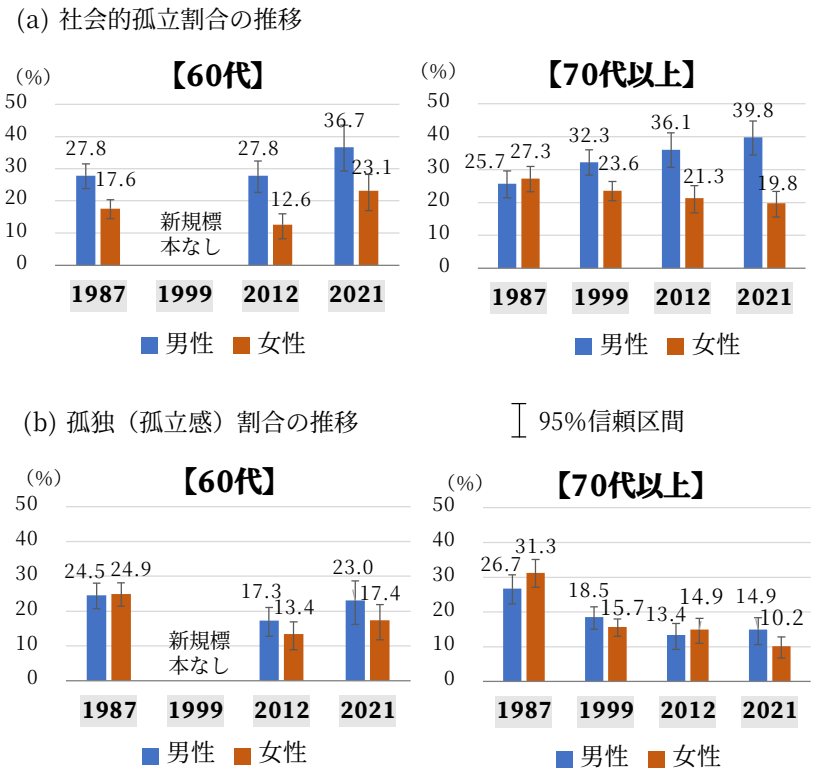

図 3　社会的孤立・孤独割合の推移

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　14件／うち国際共著　11件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 山田篤裕，小林江里香，梁浙西（Jersey Liang）	４．巻 30
２．論文標題 高齢期の貧困動態と社会主観的貧困線	５．発行年 2023年
３．雑誌名 貧困研究	６．最初と最後の頁 73-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Sugisawa H, Sugihara Y, Kobayashi E, Fukaya T, Liang J	４．巻 33(1)
２．論文標題 Trends in informal and formal home help use among older adults with disabilities in Japan: From 1999 to 2017	５．発行年 2024年
３．雑誌名 International Journal of Social Welfare	６．最初と最後の頁 220-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ijsw.12596	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Kobayashi E, Harada K, Okamoto S, Liang J	４．巻 78(4)
２．論文標題 Living alone and depressive symptoms among older Japanese: Do urbanization and time period matter?	５．発行年 2023年
３．雑誌名 The Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences	６．最初と最後の頁 718-729
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/geronb/gbac195	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Okamoto S, Kobayashi E	４．巻 76(7)
２．論文標題 Social isolation and cognitive functioning: A quasi-experimental approach	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences	６．最初と最後の頁 1441-1451
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/geronb/gbaa226	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林江里香	4．巻 4(4)
2．論文標題 全国高齢者の健康と生活に関する長期縦断研究（JAHEAD）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 老年内科	6．最初と最後の頁 351-356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Chiu C-J, Chen Y-A, Kobayashi E, Murayama H, Okamoto S, Liang J, Jou Y-H, Chang C-M	4．巻 96(article no.10449)
2．論文標題 Age trajectories of disability development after 65: A comparison between Japan and Taiwan	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Archives of Gerontology and Geriatrics	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.archger.2021.104449	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Murayama H, Liang J, Shaw BA, Botoseneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S	4．巻 76(11)
2．論文標題 Short-, medium-, and long-term weight changes and all-cause mortality in old age: Findings from the National Survey of the Japanese Elderly	5．発行年 2021年
3．雑誌名 The Journals of Gerontology, Series A: Biological Sciences and Medical Sciences	6．最初と最後の頁 2039-2046
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/gerona/glab052	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Kobayashi E, Sugawara I, Fukaya T, Okamoto S, Liang J	4．巻 44(2)
2．論文標題 Retirement and social activities in Japan: Does age moderate the association?	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Research on Aging	6．最初と最後の頁 144-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/01640275211005185	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 小林江里香	4．巻 28
2．論文標題 高齢者の主観的ウェルビーイングにおける非親族ネットワークの重要性－年齢差の検討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 生きがい研究	6．最初と最後の頁 16-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 深谷太郎，小林江里香	4．巻 67(7)
2．論文標題 高齢者のICT利用状況の変化要因について－縦断調査データを用いて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 厚生の指標	6．最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Murayama H, Liang J, Shaw BA, Botoseneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S	4．巻 21(6)
2．論文標題 Socioeconomic differences in trajectories of functional capacity among older Japanese: A 25-year longitudinal study.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of the American Medical Directors Association	6．最初と最後の頁 734-739.e1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jamda.2020.02.012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Murayama H, Liang J, Shaw BA, Botoseneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S	4．巻 25(6)
2．論文標題 Age and gender differences in the association between body mass index and all-cause mortality among older Japanese	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Ethnicity & Health	6．最初と最後の頁 874-887
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13557858.2018.1469737	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Murayama H, Kobayashi E, Okamoto S, Fukaya T, Ishizaki T, Liang J, Shinkai S	4．巻 91, article number:104220
2．論文標題 National prevalence of frailty in the older Japanese population: Findings from a nationally representative survey	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Archives of Gerontology & Geriatrics	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.archger.2020.104220	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Okamoto S, Kobayashi E, Murayama H, Liang J, Fukaya T, Shinkai S	4．巻 21, article number:38
2．論文標題 Decomposition of gender differences in cognitive functioning: National Survey of the Japanese Elderly	5．発行年 2021年
3．雑誌名 BMC Geriatrics	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12877-020-01990-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Tham YJ, Okamoto S, Kobayashi E	4．巻 34(2)　e2783
2．論文標題 The importance of examining both the amount and balance of social support: A study on the relationship between social support and subjective <scp>well‐being</scp> of older Japanese adults	5．発行年 2024年
3．雑誌名 Journal of Community & Applied Social Psychology	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/casp.2783	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Nakagawa T, Kobayashi E	4．巻 38(7)
2．論文標題 Cohort differences in trajectories of life satisfaction among Japanese older adults.	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Psychology and Aging	6．最初と最後の頁 601-614
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1037/pag0000778	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Okamoto S, Sakamoto H, Kamimura K, Komamura K, Kobayashi E, Liang J	４．巻 13 (article no. 28)
２．論文標題 Economic effects of healthy ageing: functional limitation, forgone wages, and medical and long-term care costs	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Health Economics Review	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s13561-023-00442-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計25件（うち招待講演　0件／うち国際学会　10件）

１．発表者名 百瀬由璃絵，小林江里香
２．発表標題 高齢期の社会的排除・持続的貧困がもたらす負の軌跡－入院・入所・死亡
３．学会等名 数理社会学会第74回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 村山洋史，小林江里香，杉澤秀博
２．発表標題 ライフコースにわたる経済的不利の軌跡パターンと高齢期の精神的健康
３．学会等名 第33回日本疫学会学術総会
４．発表年 2023年

１．発表者名 深谷太郎，小林江里香
２．発表標題 独居高齢者の対面・非対面接触と孤立感および生活満足度との関係
３．学会等名 第81回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2022年

１．発表者名 ターン有加里ジェシカ，小林江里香，岡本翔平
２．発表標題 ソーシャルサポートの量とバランスが日本人高齢者の主観的ウェルビーイングに与える影響
３．学会等名 日本心理学会第86回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 小林江里香
２．発表標題 老年学調査への身体機能・バイオマーカー測定の導入－全国高齢者パネル調査（JAHEAD）を事例とした学際的調査の課題（シンポジウム「『学際的』な老年学研究のこれまでとこれから；自分の『領域』をどのように越えるのか？」）
３．学会等名 日本老年社会科学会第64回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 深谷太郎，小林江里香
２．発表標題 就労経験が高齢者のICT利用に与える影響
３．学会等名 日本老年社会科学会第64回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Iida M, Okamoto S, Sugawara I, Kobayashi E
２．発表標題 Transition to widowhood: Trajectories of depressive symptomatology among Japanese older adults
３．学会等名 The 2021 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kobayashi E
２．発表標題 When does support to adult children negatively affect the subjective well-being of older Japanese? (Symposium: Shifting Issues of Support Exchange Under 20-Year Implementation of Japanese Long-Term Care Insurance Program)
３．学会等名 The 2021 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Sugawara I, Kobayashi E
２．発表標題 Neighborhood relationship matters for whom?: Interaction with family structure and functional conditions (Symposium: Shifting Issues of Support Exchange Under 20-Year Implementation of Japanese Long-Term Care Insurance Program)
３．学会等名 The 2021 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Sugisawa H, Sugihara Y, Kobayashi E, Fukaya T, Liang J
２．発表標題 Trends in informal and formal long-term care use among older adults with disabilities in Japan. (Symposium: Shifting Issues of Support Exchange Under 20-Year Implementation of Japanese Long-Term Care Insurance Program)
３．学会等名 The 2021 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 深谷太郎，岡本翔平，菅原育子，小林江里香
２．発表標題 友人関係の満足度に電子メール利用が与える影響－全国調査データを用いて－
３．学会等名 日本老年社会科学会第63回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小林江里香，岡本翔平，菅原育子，深谷太郎
２．発表標題 子どもへの経済的・非経済的支援と趣味・学習活動とのコンフリクト－well-beingとの関連による検討
３．学会等名 日本老年社会科学会第63回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Murayama H, Liang J, Shaw BA, Botoseneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S
２．発表標題 Weight change and all-cause mortality in later life: Findings from the National Survey of the Japanese Elderly
３．学会等名 The 2020 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 深谷太郎，小林江里香
２．発表標題 公共交通利用弱者の身体能力の変化－2年間の縦断調査を用いて
３．学会等名 日本老年社会科学会第62回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡本翔平，小林江里香，村山洋史，深谷太郎，菅原育子，新開省二
２．発表標題 退職による主観的幸福感の変化：JAHEAD男性サンプルにおける分析
３．学会等名 日本老年社会科学会第62回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kobayashi E
２．発表標題 Does living with a family affect social contact/participation? Variations across birth cohorts and gender in Japan.
３．学会等名 The 2023 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Nakagawa T, Hulur G, Horn AB
２．発表標題 Do positive affect and loneliness predict longevity across cultures? Findings from the United States and Japan.
３．学会等名 The 2023 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 深谷太郎，小林江里香
２．発表標題 新型コロナウイルス感染症流行が高齢者に対する面接調査への協力に与える影響について-全国調査データから
３．学会等名 第82回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kobayashi E
２．発表標題 Nationwide longitudinal study on the health and lives of Japanese older adults: Overview of JAHEAD/NSJE.
３．学会等名 7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium 2023 IAGG-AOR Satellite（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 小林江里香，岡本翔平，深谷太郎，Jersey Liang
２．発表標題 全国高齢者における社会的孤立・孤独の割合と関連要因の時代的変化－COVID-19の影響に着目して
３．学会等名 日本老年社会科学会　第65回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 深谷太郎，小林江里香
２．発表標題 高齢者のICTの利用状況－Web会議システムの利用を含めた考察－
３．学会等名 日本老年社会科学会　第65回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 百瀬由璃絵，小林江里香
２．発表標題 日本の高齢者における社会的排除と持続的貧困による死亡率の異同
３．学会等名 日本老年社会科学会　第65回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 中川威，小林江里香
２．発表標題 人生満足感の軌跡の世代差
３．学会等名 日本老年社会科学会　第65回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kobayashi E, Okamoto S, Fukaya T, Murayama H, Liang J
２．発表標題 Are older Japanese becoming increasingly isolated? Trajectories of social isolation by birth cohorts and gender.
３．学会等名 The 12th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Murayama H, Kobayashi E, Sugisawa H, Liang J
２．発表標題 Trajectories of life-course financial strain and depressive symptoms: Result from the National Survey of the Japanese Elderly.
３．学会等名 The 12th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

【調査ホームページ】
長寿社会における中高年者の暮らし方の調査－中高年者の健康と生活に関する長期縦断研究 https://www2.tmig.or.jp/jahead/

【調査結果報告冊子、報告書】
東京都健康長寿医療センター研究所：中高年者の健康と生活No.6「長寿社会における暮らし方の調査」2021年調査の結果報告．2023年2月
https://www2.tmig.or.jp/jahead/dl/pamphlet06.pdf

東京都健康長寿医療センター研究所　社会参加とヘルシーエイジング研究チーム「高齢者の健康と生活に関する縦断的研究－第10回調査（2021）研究報告書－」，2024年3月
https://www2.tmig.or.jp/jahead/dl/document_w10.pdf

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	村山　洋史 (Murayama Hiroshi) (00565137)	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究副部長 (82674)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山田　篤裕 (Yamada Atsuhiro) (10348857)	慶應義塾大学・経済学部（三田）・教授 (32612)	
研究分担者	菅原　育子 (Sugawara Ikuko) (10509821)	西武文理大学・サービス経営学部・准教授 (32417)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岡本　翔平 (Okamoto Shohei)		
研究協力者	深谷　太郎 (Fukaya Taro)		
研究協力者	梁　浙西 (Liang Jersey)		
研究協力者	秋山　弘子 (Akiyama Hiroko)		
研究協力者	杉澤　秀博 (Sugisawa Hidehiro)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	杉原　陽子 (Sugihara Yoko)		
研究協力者	津田　好美 (Tsuda Yoshimi)		
研究協力者	原田　謙 (Harada Ken)		
研究協力者	中川　威 (Nakagawa Takeshi)		
研究協力者	石崎　達郎 (Ishizaki Tatsuro)		
研究協力者	ターン　有加里ジェシカ (Tham Yukari Jessica)		
研究協力者	百瀬　由璃絵 (Momose Yurie)		
研究協力者	直井　道子 (Naoi Michiko)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	村山　陽 (Murayama Yoh)		
研究協力者	新開　省二 (Shinkai Shoji)		
研究協力者	邱　靜如 (Chiu Ching-Ju)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ミシガン大学			
その他の国・地域（台湾）	国立成功大学			